

第二百九十六話 整合性・論理性なき国家戦略文書（国防方針等）

大東亜戦争の敗因の一つは、日本の大戦略の欠如であろう。帝国国防方針はあったものの、国家戦略等は不分明と云わねばならない。開戦前後の国家戦略文書には迷いがあるようだが・・・（関連文書の詳細は割愛しているので念の為。）

1 国防方針の策定と国防方針の変質

帝国国防方針は、国防の基本戦略を記した軍事機密文書であり、国際情勢の重要結節に応じ、4回策定されている。明治40年(1907/4/4)、大正7年(1918/6/29)、大正12年(1923/2/28)及び昭和11年(1936/6/3)の計四回である。

これらの国防方針は、次第に変質していったように感じられる。当初は、重視記述されていた政戦略一致に懸かる重みが希薄化している、或いは、陸海軍が夫々の軍種の戦力造成の基準を盛り込むことに狂奔し、実質的に妥協の産物となり、総花的、両論併記になった。陸海軍の戦力造成の根拠文書化となった感すらある。また、国防方針の上位概念である国家目標や国家戦略に懸かる内容、外交内政等の記述が欠如している。国家間戦争の様相が変化したにも関わらずにそれらに対する考慮も感じられない。

2 大東亜戦争直前の政・戦略

戦争突入前後の国防方針や関連文書は以下の通りであり、多くの問題を孕んでいる。

(1) 関連文書の策定

- 1936/6/3 昭和11年帝国国防方針
- 1936/6/30 国策大綱 8/7 「国策の基準」と改訂（首、陸、海、外相）
- 1936/8/7 帝国外交方針
- 1940/7月 基本国策要綱(7/26)（大東亜共栄圏建設を根本に）
時局処理要綱(7/27)（独の西方攻勢に呼応して）
- 1941/7/2 「情勢の推移に伴う帝国国策要綱（独ノ戦開始を契機に）（関特演も）
- 1941/6/25 南方施策推進に関する件（南部仏印進駐を計画）
- 1941/9/6 帝国国策遂行要領(米国の対日全面禁輸に対応して)
- 1941/10月 対米英蘭戦争指導要綱（戦争終末促進に関する腹案を含む）

(2) 問題点等

- a 上位文書の策定・確定を受けての国防方針であり外交方針であるべきだが、思考過程が逆、計画体系も不存在である。関連文書を含めて軍が主導した。国家における軍の発言力の強大さを痛感、軍を統制しうる政治的リーダーの不在が残念。
- b 時代は総力戦時代に突入したにも拘らず、その対応具体策が不明確である。また、短期決戦且つ対一國戦を想定しつつもその具体論も不明瞭である。数ヶ国同時対応作戦の可能性や戦争遂行基盤に関する総合戦略が不明瞭である。
- c 後知恵かも知れぬが、国際情勢分析の不十分さや戦争推移予測の甘さもあろう。
- d 対露、対支、対米英の三正面を如何に律するか的基本的考えが不明瞭である。
支那事変の速やかな解決を謳うものの具体論なく、解決の強い意志が欠如している。解決し得ずして対米英蘭開戦は愚の骨頂ではないか。
北進か南進かが不明確、戦争目的が定まっていないからか？独の戦況に翻弄され、腹も定まらず、且つイニシアチブを採り得ない悲哀さが滲む。
- e 両論併記、玉虫色の表現で、陸海軍の妥協を図る傾向顕著であり、両者の認識の差異が次第に大きくなり戦略の分裂となってしまう運命にあった。
- f 陸海軍の亀裂は深刻で、それを調整・律すべき元老既になく、大元帥は関与せず、政治と統帥が分離独立し、日清・日露戦争当時とは戦争指導体制も人材も全く異なっていたのは不幸の極みだ。

(F)